

戦後経済、方向づける

故有沢広巳氏 原子力利用に尽力



59年3月、日本原子力産業会議の年次大会であいさつする有沢氏

経済学者で日本原子力産業会議会長の有沢広巳氏が死去した。同氏は、故中山伊知郎、故東畑精一両氏と並び、戦後日本の経済政策に最も大きな影響を与えた一人だった。

戦前、東大助教時代、労働一見を述べたようになる。以後、派支援の理由で検察された経験、学究生活のかたわら、数多くのもつが、戦後復興、専門は統計学だったものの、吉田茂元首相に知られ、吉田氏の経済委員に参加したことから政策に意の委員長として石炭、鉄鋼の生

有沢広巳氏を悼む

毎日

日本原子力産業会議会長、産業構造審議会総部会長などを務めた経済学者、有沢広巳氏が七日死去したが、同氏は学界の重鎮であるにとどまらず、戦後のわが国経済復興の理論的リーダーとして活躍した。各界からその死を悼む声が相次いだ。

信念の強い人だった
向坊隆・原子力委員会委員長代理（元東大校長）の話
先々週、病院にお見舞いに

局長当時、原子力行政懇談会の会長をしていたことが思い出深い。原子力発電は政治的な賛成、反対が激しいが、先生はいつも中立的立場を堅持し、終始客観的な見方をしておられた。原子力は、まだいろいろの問題を抱えているが、大きな柱を失った思いだ。

最後まで情熱傾けた
那須翔・電気事業連合会会長の話
先生は高齢にもかかわらず、最後までわが国のエネルギー問題にも情熱を傾けておられた。原子力に対するパブリック・アクセプタンス（国民的理解）が今一番必要

有沢氏の死去を惜しむ

元学士院院長で東大名誉教授、有沢広巳氏の死去に、学界だけでなく官界、経済界からも哀惜の声があがっている。石炭資源、原子力、

問題」として「政府側でも反対側でもない立場」（原子力関係者）から、賛否両派の橋渡し役をつとめ、原子力平和利用のペーシを開いた。わが国の原子力発電は、今では全発電量の三割を占めるようになっている。

的確な発言に賛辞
斎藤英四郎経団連会長の話
「私が大学生の時に統計学の助教授だった。日本経済の根幹にふれる問題について、的確な発言を続けてこられ、その

産に資源を重点的に投入する傾斜生産方式を立案した。昭和三十年ごろには、大企業と中小企業との二重構造を日本経済の問題点として指摘、経済政策の指針を示した。このように、復興、成長から現在に至るまで、日本の経済、産業政策の方向づけは同氏に負うところが大きい。

特にエネルギー政策に関わりが深く三十一年に原子力委員会委員に就任してからは、平和利用原則による原子力開発路線の策定に尽力した。日本原子力産業会議会長として四十八年の就任と同時に公共・中立路線を打ち出し、同会議を単なる業界団体から脱皮させた。晩年まで原子力平和利用の主張を貫いた。

象牙（ぞうげ）の塔にこもらず、実証を武器に現実の経済を分析、発言していく。そうした姿勢に学んだ経済学者、エコノミストは数多い。またきく人柄だが筋は通し、産業、労働界からも信頼は厚かった。

近年は、戦前の留学時代から関心のあるワイマル共和国の研究を続けるほか、中国との交流に熱意を持ち、昨年、「資本論」初版本を含む蔵書二万冊から成る「有沢文庫」を中国に寄贈した。

る。

有沢氏は戦後一貫して、わが国の経済政策立案にかかわってきた行動する経済学者で、「日本経済の復興と発展は、有沢氏の識見と指導力による」といふが大きい（通産省、福川伸次・事務次官）。とく

に有名なのは終戦直後の「傾斜生産方式」の提唱と、三十年代以降の原子力政策の確立だった。

傾斜生産方式は、疲弊した日本経済を再建するため、輸入原油を全部鉄鋼に投入、増産された鋼材を炭鉱に優先配分、こゝで増産された石炭をさらに鉄鋼に回す、というふうに、鉄鋼と石炭を雪ダル

をテコに産業の生産力全体を力かせようという。な

「日本で、有沢氏の世話にならなかつた官庁はないだろう。九十歳を超える年までずっと

の発展につくされたことに對し、最大の賛辞を送りたい。

戦後復興に寄与

3/8読者 「傾斜生産方式」●原子力政策の確立

の方式は大きな成果をあげた。

三十年代以降は、初めての原子力委員、原子力産業会議会長として、原子力政策を指導した。わが国には、唯一の被爆国として原子力に対しては、きわめて複雑な国民感情がある。この中で有沢氏は「原子力は飼ひならせれば立つ獣。どうすればならせるかがのせいだった。」

う（田村元・通産大臣、元労働相）というように、その後にも有沢氏はわが国の経済、産業、労働などの政策、行政に大きな影響を及ぼしてきた。左右両派が厳しく対立する問題でも、両者の意見を聞き、日本的なデリケートな意思決定に導く「達人」だった。これができたのも、温厚な人柄を傾けておられた。特に原子

（要職をつとめられたことには頭が下がる。心から、眞摯（めいじん）をお祈りしたい）

かけがえない人失う
那須翔電氣事業連合会会長（東京電力社長）の話「『高船にもかわからず最後までわが国のエネルギー問題に情熱を傾けておられた。特に原子

昭和の名人

向坊隆・原子力委員会委員長代理の話「強力な影響力と個性で原子力安全委員会の設立に寄与された。原子力の平和利用と安全確保の『番人』をもつて任じた方だけに、訃報には原子力関係者全体が衝撃を受けている。眞詞交換会では、使用済み燃料の処理まで含めた核燃料サイクルの確立を熱く説いておられたが、我々も遺志を継いで早期実現に努力したい。最近ドイツ・ワイマール共和国の研究をライフワークにし、毎日原稿用紙一枚は書いていたと聞く。一週間ほど前、入院先に見舞った時にはお元気だったのに」

昭和経済史の歩み象徴

朝日 3/8

有沢氏の死、各界悼む

戦前は労働派のマルクス経済学者として弾圧を受け、戦後は経済、産業政策のアドバイザーとして日本の経済復興、発展に尽くした有沢広巳氏が七日死去した。同氏の足跡は、昭和経済史の歩みを象徴するエコノミストの生涯だったといえよう。

有沢氏は終戦直後の経済混乱期に鉄鋼、石炭への傾斜生産方式を提唱したのをはじめ、経済政策についてさまざまな助言をしてきた。通産省関係では、三十七年から第一次石炭調査団長に就任し、続いて第二・五次の石炭鉱業審議会総会会長（三十九年・四十七年）をしたほか、総合エネルギー調査会長（四十年・六十二年）、産業構造審議会総会会長（四十二年

一五十八年）も歴任した。通産省は、有沢氏が戦後の経済政策の立案に参画したことや原子力、石油などエネルギー政策全般にわたって指導したことなどで「戦後の日本経済の復興と発展は、先生の識見と指導力によるところが大だった」（福川事務次官）と功績をたたえ

る。また、平岩外四・東京電力

会長（経済審議会会長）は「日本のエネルギー事情に詳しく、自前のエネルギーを、という信念から、原子力発電の推進を主導されてきた。私が最後にお会した今年正月の原子力産業会議のパーティーでも『原子力は安全に安全を重ね、日本に根づかせなければ』と、あいさつされていた。原子力に対する国民の理解が最も大切な時に、かけがえない第一人者を失ってしまった」と悼む。

有沢氏は財界との結び付きも深かった。日本生産性本部では、雇用問題委員会の委員長を務め、社会経済国民会議では四

十八年の創設以来の常任理事で、大河内一男・元東大校長の死去のあと二年間、議長を務めている。深沢敏郎・同会議専務理事（日本生産性本部常務理事）は「日本の原子力発電が現在まで成長したのは、有沢さんのおかげといってもよい。国民のおかけといってもよい。国民会議で原子力発電に前向きな提言をしようとしたら、都留重人さん（元一橋大学長）が反対、永野重雄・日商會頭（故人）が賛成し、有沢さんが都留さんをなだめて前向きな提言になったと記憶している。生涯、人をだましたことのない人であった。家もボロボロで、本だけがいっぱいあり、地震でも来たかどうかと心配したこともあった」と懐かしむ。

有沢氏は戦後は社会党の理論構築にも貢献した。その一方で、政府の審議会の要職を務めてきた。旧制二高の三年後輩で、労働派として弾圧を受けた高橋正雄・東北学院大学教授（九大名誉教授）は「後輩、友人として付き合いきたが、白分（自分）の提言は社会党が政権を取った場合の足かせになるとは思わなかったという確信を常に持っていた。若い時からのマルクス主義の立場を失っていないかったと信じている」と話している。

S. 63. 3. 8. ✓